

# 資治通鑑卷八十二晉紀四

## はじめに

本文書は、[Xe<sub>La</sub>TeX](#) で花園明朝フォントを使って縦書きをする方法を模索するためのサンプルとして作ったものです。

本文書の内容は、[国立国会図書館デジタルコレクション](#)で公開されている『[統国訳漢文大成經子史部第五卷](#)』<sup>\*1</sup>のうち、『[資治通鑑](#)』[卷八十二（晉紀四）](#)のデータ起こしです。

ただし、改行などの体裁は変更しています。また、テスト用に図（私

が個人的に作成したもの）やリンクを挿入した箇所があります。さらに、[原注](#)<sup>#2</sup>とは区別した形式で、私的な備忘録<sup>\*3</sup>を注として追加しています。注番号は元の番号と異なります。

お気づきの点やその他のコメントなどは、[Twitter](#) や [@pi--yo--ko](#) までお気軽に御連絡ください。

---

<sup>\*1</sup> [インターネット公開（保護期間満了）コンテンツ](#)です。

<sup>#2</sup> 原注はこの形式です。

<sup>\*3</sup> 私的な備忘録はこの形式です。

せいそ ぶくわうていげ  
世祖武皇帝下

二八九年・己酉

たいかうじふねん #1、なつしぐわつ、たいべうな、いつし #2、かふさい #3、す。たいしや  
太康十年、夏四月、太廟成る。乙巳、禘祭す。大赦す。

ぼようくわい、つかひ、つか、くだ、こ、ごべわつ #4、みことのり、くわい  
慕容廆、使を遣はし・降らんと請ふ。五月、詔して、廆を  
せんび、ととく、はい、くわい、かかん、えつけん、したいふ、れい、もつ、きんい #5  
鮮卑の都督に拜す。廆、何龕に謁見す。士大夫の禮を以て、巾衣し  
て門に到る。龕、兵を嚴して以て之を見る。廆乃ち改めて戎衣を服し  
て入る。人、其の故を問ふ。廆曰はく、

しゅじん、れい、もつ、かく、ま、かく、なに、な  
『主人、禮を以て客を待たず。客、何をか爲さんや』

と。龕、之を聞き、はなは #6、ふか、これ、けいい、とき、せんび、うぶんし  
と。龕、之を聞き、甚だ慙ぢ、深く之を敬異す。時に鮮卑の宇文氏  
・段氏、方に彊く、數々廆を侵掠す。廆、辭を卑くし幣を厚くして以

#1  
西紀二八九年なり。

\*2  
太康十年四月は、二八九年五月七日から二八九年六月五日まで。太康十年四月十  
一日・乙巳は、二八九年五月十七日。

#3  
大合祭なり。毀廟の主を、太祖に陳し、未だ廟を毀たざるの主をも、皆、升して  
太祖に合食する也。

\*4  
太康十年五月は、二八九年六月六日から七月四日まで。

#5  
魏晉間、士大夫、尊貴に謁見するに、巾襦を著するを以て禮と爲す。襦は單衣な  
り。

#6  
胡三省曰はく、降を受くるは敵を受くるが如くし。邊に居るの帥、兵を嚴して以  
て四夷の客を見る、未だ過と爲さざるなり。何ぞ必ずしも以て慙と爲さんやと。

て之に事ふ。段國單于階、女を以て廐に妻す<sup>#1</sup>。黠・仁・昭を生む。  
廐、遼東の僻遠なるを以て、徙りて徒河<sup>#2</sup>の青山に居る。

冬十月<sup>\*3</sup>、明堂及び南郊の五帝の位を復す<sup>#4</sup>。

十一月丙辰<sup>\*5</sup>、尚書令濟北の成侯荀勗・卒す。勗、才思有り、  
善く人主の意を伺ふ。是を以て能く其の寵を固くす。久しく中書に在  
り、専ら機事を管る。尚書に遷るに及びて、甚だ罔悵<sup>#6</sup>たり。  
人、之を賀する者有り。勗曰はく、

『我が鳳皇池を奪ふ。諸君何ぞ賀するや』

と。

帝、意を聲色に極め、遂に・疾を成すに至る。楊駿、汝南王亮を  
忌み、之を排出す。甲申<sup>\*7</sup>、亮を以て侍中・大司馬・假黃鉞大都督と  
爲し、豫州の諸軍事を督し、許昌に治せしめ、南陽王東を徙して秦王と

<sup>#1</sup> 慕容氏・段氏、遂に婚姻の國と爲る。

<sup>#2</sup> 縣の名。故城は今の奉天省遼瀋道錦縣の西北にあり、青山はその地の山の名なり

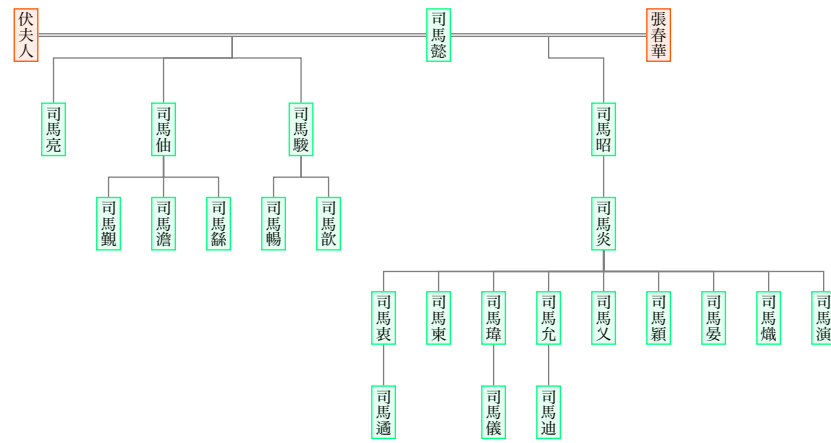
<sup>\*3</sup> 太康十年十月は、二八九年十月三十一日から二八九年十一月二十九日まで。

<sup>#4</sup> 明堂・南郊より五帝の座を除くこと、七十九卷泰始二年に見ゆ。

<sup>\*5</sup> 太康十年十一月に丙辰が見当たらないような……。ちなみに太康十年十月二十五  
日・丙辰なら二八九年十一月二十四日。

<sup>#6</sup> 志を失ひ恨望する貌。

<sup>\*7</sup> 太康十年十一月二十三日・甲申は、二八九年十二月二十二日。



爲し、關中の諸軍事を都督せしめ、始平王瑋を楚王と爲し、荊州の諸軍事を都督せしめ、濮陽王允を淮南王と爲し、揚江二州<sup>#1</sup>の諸軍事を都督せしめ、竝に節を假して<sup>#2</sup>國に之かしむ。皇子父を立てて長沙王と爲し、潁を成都王と爲し、晏を吳王と爲し、熾を豫章王と爲し、演を代王と爲し、皇孫適を廣陵王と爲す。又、淮南王の子迪を封じて漢王と爲し、楚王の子儀を毗陵王と爲し、扶風王暢を徙して順陽王と爲し、暢の弟歆を新野公<sup>#3</sup>と爲す。暢は駿の子なり。琅邪王覲の弟澹を東武公と爲し、繇を東安公と爲す。覲は伯の子なり。

初め帝、才人<sup>#4</sup>謝玖を以て太子に賜ふ。皇孫適を生む。宮中、嘗て夜、火を失す。帝、樓に登りて之を望む。適、年五歳。帝の裾を牽きて闇中に入りて曰はく、

『暮夜倉猝なり。宜しく非常に備ふべし。人主を照見せしむ可からず』

<sup>#1</sup> 惠帝元康元年、揚州の豫章・鄱陽・廬陵・臨川・南康・建安・晉安、荊州の桂陽・安成・武昌、合はせて十郡を割きて江州を置く。此の時未だ江州有らず、疑ふらくは江二の二字は衍ならんか。

<sup>#2</sup> 晉の制、都督諸軍事に使持節あり、持節あり、假節あり。使持節は二千石以下を殺すを得。持節は官位無き人を殺す、若し軍事には使持節と同じ。假節は惟だ軍事のみに軍令を犯す者を殺すを得。

<sup>#3</sup> 晉の制、宗室の、郡公に封ぜらるる者は、制度、小國の王の如し。

<sup>#4</sup> 女官の位、美人に次ぐ。晉の武帝、漢魏の制を采り、三夫人・九嬪の下に、美人・才人・中才人あり、爵、千石以下に視ふ。

と。帝、是に由りて之を奇とす。嘗て羣臣に對し、

### 『適、宣帝に似たり』

と稱す。故に天下、咸、之に歸仰す。帝、太子の不才なるを知る。然れども適の明慧なるを待む。故に廢立の心無し。復た王佑の謀を用ひ、太子の母弟東・瑋・允を以て、分ちて要害を鎮せしむ。又楊氏の偏らんことを恐れ、復た佑を以て北軍中候と爲し、禁兵を典らしむ。帝、皇孫適の爲めに、高く僚佐を選び、散騎常侍劉寔が志行清素なるを以て、命じて高陵王の傳と爲す。

寔、時俗・進趣を喜み廉讓少きを以て、  
官に除せられ謝章を通ずる者をして・必ず賢を推し能に讓りて・乃ち之を通ずるを得しめ・一官缺くるときは則ち人の讓る所と爲ること最も多き者を選びて之を用ひんことを欲し、以爲はく、

『人情、争ふときは則ち己の如かざる所を毀らんと欲し、讓るときは則ち競うて己に勝れるを推す。故に世争ふときは則ち優劣分ち難く、時讓るときは則ち賢智顯れ出づ。此の時に當りてや、能く身を退け己を脩むるときは、則ち

#1 王濟の弟なり。羊祜と竝に文帝に事ふ、帝これを寵任す。

#2 雍・荆・揚の地をいふ。

\*3 直前の段落には「皇孫適を廣陵王と爲す。」とあるので、どちらかが誤記なのではないか。

これ ゆづ ものおほ ひんせん まも ほつ いへど うべ  
之に譲る者多し。貧賤を守らんと欲すと雖も、得可からざる  
なり。馳驚進趨して、而も人に譲られんことを欲するは、猶  
ほ却行して而も前まんことを求むるがごときなり』

と。

淮南の相劉頌・上疏して曰はく、

『陛下、以へらく、法禁寛縦なること、之を積むこと素有  
り、未だ一旦に直繩を以て下を御す可からずと。此れ誠に  
時の宜しきなり。然れども世を矯め弊を救ふに至りては、  
自ら宜しく漸く清肅に就くべし。譬へば猶ほ舟を行るが  
ごとし。迅流を横截せずと雖も、然れども當に漸靡 <sup>#1</sup> して  
往き、稍く趨く所に向ふべし。然る後濟るを得るなり。  
泰始より以來、將に三十年ならんとす <sup>#2</sup>。凡そ諸の事業  
、既往よりも茂ならず。陛下の明聖を以て、猶ほ未だ叔世  
<sup>#3</sup> の敝に反して、以て始初の隆を成し、之を後世に傳へず  
。慮 無からざらんや。夫の異時をして、大業或は安ん  
ぜざる有らしめば、其の憂責、猶ほ陛下に在らん。臣聞く、  
社稷の計を爲すは、親賢を封建するに若くは莫しと。然れど

<sup>#1</sup> 次第になびき従ふこと。水の勢に因りて漸靡して舟を行るをいふ。  
<sup>#2</sup> 帝、禪を受けて泰始と改元せしより、是に至るまで、二十五年。  
<sup>#3</sup> 末世なり。

も宜しく審かに事執を量るべし。諸侯の・義に率つて動く  
者をして、其の力、以て京邑を維帶するに足らしむ可し。若  
し禍心を包藏せば、其の執、獨り以て爲す有るに足らざら  
しめよ。其の此を齊ふること甚だ難し。陛下、宜しく古今  
に達するの士と、深く共に之を籌るべし。周の諸侯、罪有れ  
ば、其の身を誅放すれども、而も國祚泯びず<sup>#1</sup>。漢の諸侯  
、罪有り、或は子無き者は、國隨つて以て亡ぶ。今、宜し  
く漢の敵に反し、周の舊に循ふべし。則ち下固くして上安  
からん。天下は至大、萬事は至衆。人君は至少、天日に同じ  
。是を以て、聖王の化は、要を己に執り、務を下に委ぬ。  
勞を惡みて逸を好むに非ず。誠に政體宜しく然るべきを以て  
なり。夫れ事の始に居りて以て能否を別つは、甚だ・察し  
難きなり。成敗に因りて以て功罪を分つは、甚だ・識り易き  
なり。今、陛下、毎に始を造すに精しくして、終を考する  
に怠る。此れ政功の未だ善からざる所以なり。人主、誠に  
能く易<sup>#2</sup>に居り要を執り、功罪を成敗の後に論ずれば、則  
ち羣下、其の誅賞を逃るる所無し。古は六卿<sup>#3</sup>、職を

<sup>#1</sup> 周、齊の哀公を烹て、而も其の弟靜を立て、宣王、魯侯伯御を誅して而も孝公を  
立つるの類の如し。

<sup>#2</sup> 簡易。

<sup>#3</sup> 周禮に、天官冢宰・地官司徒・春官宗伯・夏官司馬・秋官司寇・冬官司空、是れ  
を六卿と爲す、而して冢宰これを總ぶ。



分かち、冢宰を師と爲す。秦漢已來、九列、事を執り、丞相  
・都總す。今、尚書・制斷し、諸卿、成を奉ず<sup>#1</sup>。古制に  
於て、太だ重しと爲す。衆事を出して外寺<sup>#2</sup>に付し・之  
を専らにするを得しめ・尚書は大綱を統領すること・丞  
相の爲の若くす可し。歲終に、功を課し簿を校し、賞罰せ  
んのみ。斯れ亦可なり。今、動くに皆成を上を受く。上の失  
ふ所、復た以て下を罪するを得ず。歲終に、事功建たざるも  
、責むる所を知らざるなり。夫れ細過謬妄は、人情の必  
ず有る所なり。而して悉く糾すに法を以てせば、則ち朝  
野、立人<sup>#3</sup>無からん。近世以來、監司<sup>#4</sup>たる者、類ね大  
綱をば振はずして、微過をば必ず擧ぐ。蓋し豪彊を畏避す  
るに由る。而して又、職事の曠しきを懼れ、則ち密網を謹  
みて以て微罪を羅し、奏効をして相接せしむ。狀、公を盡  
すに似たれども、法を撓ますこと其の中に在り。是を以て、  
聖王は、碎密<sup>#5</sup>の案を善しとせずして、必ず凶猾の奏を  
責む。則ち政を害するの姦、自然に禽にせらる。夫れ創

<sup>#1</sup> 漢の光武以來、吏事を以て尚書を責め、事、臺閣に歸し、諸卿は成を奉ずるのみ。

<sup>#2</sup> 諸卿の官廳。寺は官廳をいふ。

<sup>#3</sup> 晉書劉頌傳には全人に作る。

<sup>#4</sup> 御史臺の官及び諸州の刺史は皆監司なり。

<sup>#5</sup> 繁瑣微密。

業の勳は、教を立て制を定むるに在り。遺風をして人心を繋ぎ、餘烈をして幼弱を匡さしむ。後世、之に憑れば、昏しと雖も猶ほ明かなるがごとく、愚なりと雖も智なるが若し<sup>#1</sup>。乃ち尚ぶに足るなり。夫の・官署を脩飾するに至るまで、凡そ諸の作役は、恒に・太だ過ぐるを傷む。擧らざるを患へず。此れ將來、陛下を須たずして自ら能くする所の者なり。今、須たざる所を勤め、以て憑る所を傷るは、竊に以て過てりと爲す』

と。帝、皆、用ふる能はず。

詔して、劉淵を以て匈奴北部の都尉<sup>#2</sup>と爲す。淵、財を輕んじ施を好み、心を傾け物に接す。五部の豪桀、幽冀の名儒、多く往きて之に歸す。

奚軻<sup>#3</sup>の男女十萬口、來り降る。

<sup>#1</sup>法制修まり明かなるときは、後嗣昏愚なりと雖も、據依する所あり、其治猶ほ明智の爲の若きを言ふ。  
<sup>#2</sup>時に匈奴五部の帥を改めて五部都尉と爲す。  
<sup>#3</sup>夷種なり。

かうけいくわうてい  
孝惠皇帝 #1 上の上 じやう じやう

二九〇年・庚戌

えいきぐわんねん #2 はるしやうぐわつしんいうさく  
永熙元年 春正月辛酉朔 \*3、太熙と改元す。  
たいき かいげん

きし \*4、わうこん もつ しと な  
己巳、王渾を以て司徒と爲す。

しくうじちうしやうしよれいゑいくわん  
司空侍中尚書令衛瓘の子宣、繁昌公主に尚す。宣、酒を嗜み、過  
しつおほ やうしゆん くわん にく これ お ほつ すなは くわうもん はか とも  
失多し。楊駿、瓘を惡み、之を逐はんと欲す。乃ち黃門と謀り、共  
せん そし ぶてい すす こうしゆ うば くわん は おそ らう っ  
に宣を毀り、武帝に勧めて公主を奪はしむ。瓘慚ぢ懼れ、老を告げて  
くらぬ のが みことのり くわん くらぬ たいはう すす こう #5 もつ てい っ  
位を遜る。詔して、瓘の位を太保に進め、公を以て第に就か  
しむ。

げきやう かうしぎじよ こう  
劇陽の康子魏舒・薨ず。

さんぐわつかふし \*6 いうくわうくたい ふせきかん もつ しくう な  
三月甲子、右光祿大夫石鑒を以て司空と爲す。

#1  
諱は衷、字は正度、武帝の第二子なり。

#2  
西紀二九〇年なり。ここに記するが如く、正月朔、武帝は太熙と改元せるを、三  
月、帝崩じて惠帝立つや、更に改元して永熙といへるなり。

\*3  
太熙元年一月一日・辛酉は、二九〇年一月二十八日。

\*4  
太熙元年一月九日・己巳は、二九〇年二月五日。

#5  
瓘は、菑陽公に封ぜらる。

\*6  
太熙元年三月五日・甲子は、二九〇年四月一日。

帝、疾篤し。未だ顧命有らず。勳舊の臣、多く已に物故す。侍中車騎將軍楊駿、獨り疾に禁中に待す。大臣、皆、左右に在るを得ず。駿因つて輒ち私意を以て、要近<sup>#1</sup>を改易し、其の心腹を樹つ。會々帝、小しく聞え、其の新に用ふる所の者を見、色を正しうして駿に謂つて曰く、

『何ぞ便ち爾を得る』

と。時に汝南王亮<sup>#2</sup>、尚ほ未だ發せず。乃ち中書をして詔を作らしめ、亮を以て駿と同じく政を輔けしめ、又、朝士の・聞望有る者數人を擇びて之を佐けしめんと欲す。駿、中書より詔を借りて之を觀、得て便ち藏め去る。中書監華廙・恐懼し、自ら往きて之を索む。終に・與へず。會々帝復た迷亂す。皇后、

『駿を以て政を輔けしめん』

と奏す。帝、之を頷く。夏四月辛丑<sup>#3</sup>、皇后、華廙及び中書令何劭を召し、口づから帝の旨を宣べ、詔を作らしめ、駿を以て太尉・太子太傅・都督中外諸軍事・侍中・錄尚書事と爲す。詔成り、后、廙・邵に對し以て帝に呈す。帝、視て言無し。廙は歆の孫、劭は曾の子なり<sup>#4</sup>。

<sup>#1</sup> 重要親近の官職に在る人。

<sup>#2</sup> 去年、亮をして出でて豫州を督せしむ。

<sup>#3</sup> 太熙元年四月十二日・辛丑は、二九〇年五月八日。

<sup>#4</sup> 華歆は漢魏の間に仕へ、何曾は魏晉の間に仕へ、位、皆、公に至る。

つひ じよなんわうりやう うなが ちん おもむ ていつ すこ い  
遂に汝南王亮を趣して鎮に赴かしむ。帝尋いで小しく問え、

『汝南王來れりや未だしや』  
じよなんわうきた いま

と さいう  
と問ふ。左右、

『未だ至らず』  
いま いた

い ていつひ こんとく #1 し、 己酉 \*2、 含章殿 #3 に崩ず。 (年五十五) 帝  
と言ふ。帝遂に困篤、  
うりやう #4 弘厚、 明達にして 謀を好み、 直言を容納し、 未だ嘗て色  
ひと うしな  
を人に失はず。

たいし くわうてい くらゐ つ たいしや かいげん #5、 皇后を尊びて皇太  
太子、 皇帝の位に即き、 大赦し、 改元し  
こう い ひかし た くわうごう な  
后と曰ひ、 妃賈氏を立てて皇后と爲す。

やうしゆん い たいきよくでん #6 を しきうまさ ひん #7、 六宮出でて  
楊駿入りて太極殿  
じ しか しゆん でん くだ こほんひやくにん もつ みづか まも  
辭す。而るに駿、 殿を下らず、 虎賁百人を以て自ら衛る。

せきかん ちうごんちやうせう みことり さんりよう つく かん  
石鑒と中護軍張劭とに 詔して、 山陵を作るを監せしむ。

#1  
病危篤となる也。

\*2  
太熙元年四月二十日・己酉は、 二九〇年五月十六日。

#3  
蓋し皇后宮中に在り。

#4  
器宇度量。

#5  
太熙を改めて永熙と爲すなり。

#6  
前殿なり。

#7  
時に梓宮蓋し含章殿より徙りて太極殿に殯するなり。

汝南王亮、駿を畏れ、敢へて(宮二入りテ)喪に臨まず。大司馬門外に哭し、<sup>#1</sup>出でて城外に營し、表して・葬を過ぎて(鎮二)行かんことを求む。

『亮、兵を擧げて駿を討たんと欲す』

と告ぐる者或り。駿大いに懼れ、太后に白し、帝をして手詔を爲らしめ、石鑒・張劭に與へ、陵兵を帥めて亮を討たしむ。劭は駿の甥なり。即ち所領を帥め、鑒を趣して速かに發せんとす。鑒、以て然らずと爲し、之を保持<sup>#2</sup>す。亮、計を廷尉何勗に問ふ。勗曰はく、

『今、朝野、皆、心を公に歸す。公、(何ゾ)人を討たずし

て、人の討つを畏るるや』

と。亮、敢へて發せず。夜馳せて許昌に赴く。乃ち免るを得たり。駿の弟濟及び甥河南の尹李斌、皆、駿に勧めて亮を留めしむ。駿從はず。濟、尚書左丞傅咸に謂つて曰く、

『家兄、若し大司馬を徴し、身を退けて之を避けば、門戸庶幾はくは全うす可からん』

と。咸曰はく、

<sup>#1</sup>亮は未だ鎮に行かずして、府中に留まり居たりしが、駿を畏れて敢へて宮に入りて哭せざりしなり。君父の喪を門外に哭するは禮にあらざるなり。  
<sup>#2</sup>亮が兵を擧げざるを保證して、亮を討つの兵を持して發せざる也。

『宗室・外戚は、相侍みて安と爲す。但だ大司馬を召して還らしめ、共に至公を崇びて以て政を輔けば、避くるを爲す無きなり』

と。濟、又、侍中石崇をして、駿を見て之を言はしむ。駿従はず。

五月辛未<sup>\*1</sup>、武帝を峻陽陵に葬る。

楊駿、自ら・素より美望無きを知り、魏の明帝の卽位のご事に依り・普く封爵を進め・以て媚を衆に求めんと欲す。左軍將軍傅祗、駿に書を與へて曰く、

『未だ帝王始めて崩じて、臣下、功を論ずる者有らざるなり』

と。駿従はず。祗は赧<sup>#2</sup>の子なり。丙子<sup>\*3</sup>、詔して、中外の羣臣、皆、位一等を増し、喪事に預る者は二等を増し、二千石已上は、皆、關中侯<sup>#4</sup>に封じ、租調を復すること一年。散騎常侍<sup>#5</sup>石崇・散騎侍郎何攀、共に上奏して以爲はく、

<sup>\*1</sup> 永熙元年五月十三日・辛未は、二九〇年六月七日。なおこの年は、五月の後に閏五月が入る。

<sup>#2</sup> 傳赧。魏に仕へて嘉平・正元の間に顯る。

<sup>\*3</sup> 永熙元年五月十八日・丙子は、二九〇年六月十二日。

<sup>#4</sup> 關内侯の下に位す。共に爵名ありて封土なきものなり。

<sup>#5</sup> 常に侍中に作るべし。

『帝、位を東宮に正すこと、二十餘年、今、大業を承く。而して賞を班ち爵を行ふこと、泰始の革命の初め及び諸將が呉を平げしの功よりも優るは、輕重稱はず。且つ大晉、世を卜すること窮り無し。今の・制を開くこと、當に後に垂るべし。若し爵有り必ず進めば、則ち數世の後、公侯に非ざるもの莫からん』

と。  
從はず。

録し、百官、己を總べて以て聽かしむ。傳咸、駿に謂つて曰はく、

『諒闇行はれざることを久し。今、聖上謙冲にして、政を公に委ぬ。而して天下、以て善と爲さず。懼らくは明公未だ當り易からざらんことを。周公は大聖なるすら、猶ほ流言を致せり。況んや聖上の春秋、成王の年に非ざるをや。竊かに謂ふに、山陵（ノ事）既に畢らば、明公、當に審かに進退の宜しきを思ふべし。苟くも以て其の忠款を察する有らば、言豈に多きに在らんや』

#1

漢の文帝のとき喪を軽くするの詔有りしより、諒闇三年の制行はれざること久し。

#2

周の成王幼冲にして、周公、政を攝するや、四國流言せり。

#3

帝、泰始二年。皇太子と爲る。時に年九歳。是に至りて三十二歳なり。



と。駿しゅん従したがはず。咸かん數しばいさと諫かんむ。駿しゅん漸やうやく平たひらかならず。咸かんを出いだして郡守ぐんしゆと爲なさんと欲ほつす。李斌りひん曰いはく、

『正人せいじんを斥逐せきちくせば、將まさに人望じんぼうを失うしなはんとす』

と。乃すなはち止やむ。楊濟やうせい、咸かんに書しよを遺おくりて曰いはく、

『諺ことわざに云いはく、

「子こを生うみて癡ちならば、官事くわんじを了れうせん」<sup>#1</sup>

と。官事くわんじは未いまだ了れうし易やすからざるなり。頭かしらを破やぶらんことを想さう慮りよす<sup>#2</sup>。故ゆゑに具つぶさに白まをす有り』

と。咸かん、復書ふくしよして曰いはく、

『衛公ゑいこう、言いへる有あり、

「酒色しゆしよく、人ひとを殺ころすこと、直ちよくを作なすよりも甚はなはだし

」

と。酒色しゆしよくに坐ざして死しするも、人ひと、悔くゆるを爲なさず。而しかに逆あらかじめ・直ちよくを以もつて禍わざはひを致いたさんことを畏おそるは、此これ心正こころただしき能あたはざるに由より、苟且こうしよを以もつて明哲めいてつと爲なさんと欲ほつするな

<sup>#1</sup> 官事を處するには餘りに明察なるべからず、稍癡愚なるが如くして、知れども知らざるふりをなすべきを言ふ。

<sup>#2</sup> 咸が直言を以て禍を致さんことを慮る也。

るのみ<sup>#1</sup>。古より、直を以て禍を致す者は、當に枉れるを矯めて正しきに過ぎ、或は忠篤ならず、亢厲を以て聲<sup>#2</sup>を爲さんと欲するに由るべし。故に忿を致すなるのみ。安んぞ慳慳<sup>#3</sup>として忠益して、返つて怨疾せらるる有らん

や』

と。

楊駿、賈后の險悍にして權略多きを以て、之を忌む。故に其の甥段廣を以て散騎常侍と爲し、機密を管らしめ、張劭を中護軍と爲し、禁兵を典らしむ。凡そ詔命有れば、帝・省し訖り、入りて太后に呈し、然る後之を行ふ。

駿、政を爲す、嚴碎專愎なり。中外多く之を惡む。馮翊の太守孫楚、駿に謂つて曰はく、

『公、外戚を以て、伊霍<sup>#4</sup>の任に居る。當に至公誠信謙順を以て之に處るべし。今、宗室彊盛なるに、而も公、與に共に萬機に參ぜず、内には猜忌を懷き、外には私昵を樹つ。』

<sup>#1</sup> 詩に曰はく、既に明且つ哲、以て其の身を保つと。此れ、世人の直言する能はず、特に苟且を以て身を保つの計と爲すのみなるを言ふ。

<sup>#2</sup> 名聲。

<sup>#3</sup> 誠懇なる貌。

<sup>#4</sup> 伊尹・霍光

禍わざはひ至いたること日無ひなからん』

と。駿しゅん從したがはず。楚そは資し<sup>#1</sup>の孫まこなり。

弘訓こうくんの少府せうふ<sup>#2</sup> 蒯くわい欽きんは、駿しゅんの姑この子こなり、數々しばしば直言ちよくげんを以もつて駿しゅんを犯をかす。  
他人たにん、皆みな、之これが爲ためめに懼おそる。欽きん曰いはく、

『楊文長やうぶんちやう<sup>#3</sup> は闇くらしと雖いへども、猶なほ人ひとの・罪無つみなきを知る。妄みだりに殺ころす可べからず。我われを疎うとんずるに過すぎじ。我われ、疎うとんぜらるるを得えば、乃すなはち以もつて免まぬかる可べし。然しからずんば、之これと俱ともに族ぞくせられん』

と。

駿しゅん、匈奴きやうどの東部とうぶ<sup>#4</sup> の人王ひとわう彰しやうを辟へきして司馬しばと爲なす。彰しやう、逃避たうへきして・受けず。其その友新興ともしんこう<sup>#5</sup> の張宣子ちやうせんし、怪あやしみて之これを問とふ。彰しやう曰いはく、

『古いにしへより、一姓いつせいに二后にこうあるは、未だ敗いまれざる有あらず。況いはんや楊太傅やうたいふは、小人せうじんを昵近ちつきんし、君子くんしを疎遠そゑんし、權けんを專もつぱらにし  
自みづから恣ほしいままにす。敗やぶるること日無ひなからん。吾われ、海うみを踰こえ塞さいを  
出いでて以もつて之これを避さくとも、猶なほ禍わざはひに及およばんことを懼おそる。

<sup>#1</sup> 孫資。魏の三祖に事へて機密を掌る。

<sup>#2</sup> 景皇后。弘訓宮に居り、少府を置く。

<sup>#3</sup> 楊駿。字は文長。

<sup>#4</sup> 卽ち匈奴の左部なり。太原の茲氏縣に居る。

<sup>#5</sup> 郡の名、今の山西省の西北部の地。

奈何ぞ其の辟に應ぜんや。且つ武帝、社稷の大計を惟はず、  
嗣子、既に負荷する克はず、遺を受くる者、復た其の人に非  
ず。天下の亂るること、立ちて待つ可きなり』

と。

秋八月壬午<sup>\*1</sup>、廣陵王適を立てて皇太子と爲し、中書監何劭を太  
子太師と爲し、衛尉裴楷を少師と爲し、吏部尚書王戎を太傅と爲し、前  
の太常張華を少傅と爲し、衛將軍楊濟を太保と爲し、尚書和嶠を少保  
と爲す。太子の母謝氏を拜して淑媛<sup>#2</sup>と爲す。賈后、常に謝氏を別室  
に置き、太子と相見るを聽さず。初め和嶠、嘗て從容として武帝に言つ  
て曰はく、

『皇太子、淳古の風有り。而して末世は僞多し。恐らく  
は陛下の家事を了せざらん』

と。武帝・默然たり。後、荀勗等と同じく武帝に侍す。武帝曰はく、

『太子近ごろ入朝せしが、差長進せり。卿、俱に之に詣り・  
粗ぼ世事に及ぶ可し』

と。既に還り、勗等竝に稱す、

<sup>\*1</sup> 永熙元年八月二十六日・壬午は、二九〇年十月十六日。

<sup>#2</sup> 九嬪の一。淑妃・淑媛・淑儀・脩華・脩容・脩儀・婕妤・容華・充華を九嬪と爲  
す。

『太子、明識雅度、誠に明詔の如し』

と。嶠曰はく、

『聖質、初の如し』

と。武帝、悦ばずして起つ。帝位に即くに及びて、嶠、太子適に従つて入朝す。賈后、帝をして問はしめて曰はく、

『卿、昔、我を家事を了せじと謂へり。今日、定めて如何』

と。嶠曰はく、

『臣、昔、先帝に事へしとき、曾て斯の言有りき。言の・効

あらざるば、國の福なり』

と。

冬十月辛酉<sup>\*1</sup>、石鑒を以て太尉と爲し、隴西王泰を司空と爲す。

劉淵を以て建威將軍・匈奴五部の大都督と爲す<sup>#2</sup>。

<sup>\*1</sup>

永熙元年十月六日・辛酉は、二九〇年十一月二十四日。

<sup>#2</sup>

淵が五部大都督と爲れるは、左國城大單于の權輿なり。

## 二九一年・辛亥

元康元年<sup>#1</sup>、春正月乙酉朔<sup>\*2</sup>、永平と改元す。

はじめ 賈后の・太子妃たるや、嘗て妬を以て手づから數人を殺す。又、  
戦を以て孕妾に擲つ。子、刃に随つて墮つ。武帝大に怒り、金墉城  
を脩め、將に之を廢せんとす。荀勗・馮統・楊珧及び充華・趙粲、共  
に之を營救して曰はく、

『賈妃は年少し。妬は婦人の常情なり。長ずるときは自  
ら當に差ゆべし』

と。楊后曰はく、

『賈公閭<sup>#3</sup>は、社稷に大勳有り。妃は親しく其の女なり。  
正に復た妬忌すとも、豈に遽に其の先徳を忘る可けんや』

と。妃、是に由りて、廢せられざるを得たり。后數々妃を誡厲す。妃、  
后が己を助くるを知らず、返つて后を以て己を武帝に構ふと爲し、更  
に之を恨む。帝位に即くに及びて、賈后、肯て婦道を以て太后に事へず

<sup>#1</sup> 西紀二九一年なり。楊駿、政を執り、永平と改元せしを、駿誅せられて、更にこ  
の元康と改めたるなり。

<sup>\*2</sup> 永平元年一月一日・乙酉は、二九一年二月十六日。

<sup>#3</sup> 賈充、字は公閭。晉の魏に代るや、充の力多きに居る。

。又、政事に干預せんと欲すれども、太傅駿に抑へらる。殿中郎<sup>#1</sup>渤海の孟觀・李肇は、皆、駿の禮せざる所なり。陰に駿を構へて云はく、

『將に社稷を危くせんとす』

と。黃門董猛、素より東宮に給事し、寺人監<sup>#2</sup>たり。賈后、密に猛をして觀・肇と與に、駿を誅し太后を廢せんことを謀らしめ、又、肇をして汝南王亮に報ぜしめ、(亮ヲシテ)兵を擧げて駿を討たしめんとす。亮可かず。肇、都督荊州諸軍事楚王瑋に報ず。瑋、欣然として之を許す。乃ち入朝せんことを求む。駿素より瑋の勇銳なるを憚り、之を召さんと欲すれども未だ敢てせず、其の朝せんことを求むるに因りて、遂に之を聽す。二月癸酉<sup>\*3</sup>、瑋及び都督揚州諸軍事淮南王允・來朝す。

三月辛卯<sup>\*4</sup>、孟觀・李肇、帝に啓し、夜、詔を作り、駿・謀反すと誣ひ、中外戒嚴し、使を遣はし、詔を奉じて駿を廢し、侯を以て第に就かしめ、東安公繇に命じ、殿中四百人を帥ゐて駿を討たしめ、楚王瑋をして司馬門に屯せしめ、淮南の相劉頌を以て三公

<sup>#1</sup> 晉の制、二衛に殿中將軍・中郎・校尉・司馬を置く。

<sup>#2</sup> 東宮の諸閹(宦官)を主る。

<sup>\*3</sup> 永平元年二月二十日・癸酉は、二九一年四月五日。

<sup>\*4</sup> 永平元年三月八日・辛卯は、二九一年四月二十三日。

<sup>#5</sup> 駿さきに臨晉侯に封ぜらる。

尚書<sup>#1</sup>と爲し、殿中に屯衛せしむ。段廣<sup>#2</sup>跪きて帝に言つて曰はく、

『楊駿は、孤公にして子無し。豈に反する理有らんや。願はくは陛下、之を審かにせよ』

と。帝答へず。

時に駿、曹爽の故府に居る。武庫の南に在り。内に變有りと聞き、衆官を召して之を議す。太傅の主簿朱振、駿に説きて曰はく、

『今、内に變有るは、其の趣知る可し。必ず是れ閹豎、賈后の爲めに謀を設け、公に利あらざらん。宜しく雲龍門を燒きて以て之を脅し、事を造す者の首を索め、萬春に入り、姦人を取るべし。殿内震ひ懼れ、必ず斬りて之を送らん。然らずんば、以て難を免る無からん』

と。駿素より怯懦にして・決せず。乃ち曰はく、

『雲龍門は、魏の明帝の造る所、功費甚だ大なり。奈何ぞ

<sup>#1</sup>漢の成帝、三公尚書を置き、斷獄を主らしむ。

<sup>#2</sup>段廣は駿の甥なり。駿、廣をして近侍と爲りて以て左右の己を間するを防がしむ。  
<sup>#3</sup>然れども終に益無きなり。

<sup>#3</sup>洛陽宮城の正南門。

<sup>#4</sup>東門。



これを焼かん』

と。侍中傳祇、駿に白す、

『請ふ尚書武茂と與に宮に入り、事勢を觀察せん』

と。因つて羣僚に謂つて曰はく、

『宮中は宜しく空しくすべからず』

と。遂に揖して階を下る。衆皆走る。茂猶ほ坐す。祇顧みて曰はく、

『君は天子の臣に非ずや。今、内外隔絶し、國家<sup>#1</sup>の在所を知らず。何ぞ安坐するを得ん』

と。茂乃ち驚き起つ。駿の黨左軍將軍<sup>#2</sup>劉豫、兵を陳して門に在り。右軍將軍裴頴に遇ひ、太傅の在る所を問ふ。頴、之を給きて曰はく

『向に西掖門に於て、公が素車に乗り・二人を従へて西に出づるに遇へり』

と。豫曰はく、

『吾、何にか之かん』

と。頴曰はく、

<sup>#1</sup>天子を謂ふ。

<sup>#2</sup>晉に左軍・右軍・前軍・後軍あり、是れを四軍と爲す。

『宜しく廷尉に至るべし』

と。豫、頤の言に従ひ、遂に（兵ヲ）委てて去る。尋いで頤に詔して、豫に代りて左軍將軍を領し、萬春門に屯せしむ。頤は秀<sup>#1</sup>の子なり。

皇太后、帛に題して書を爲り、之を城外に射る。曰はく、

『太傅を救ふ者は賞有り』

と。賈后因つて宣言す、

『太后同じく反す』

と。尋いで殿中の兵出で、駿の府を焼く。又、弩手をして閣上に於て、駿の府に臨みて之を射しむ。駿の兵、皆、出づるを得ず。駿、馬廄に逃る。就きて之を殺す。孟觀等遂に駿の弟珧・濟・張劭・李斌・段廣・劉豫・武茂及び散騎常侍楊邈・中書令蔣俊・東夷校尉文鳶を收へ、皆、三族を夷ぐ。死する者數千人。

珧、刑に臨みて、東安公繇に告げて曰はく、

『表、石函に在り<sup>#2</sup>。張華に問ふ可し』

と。衆謂はく、

<sup>#1</sup> 裴秀、七十八卷魏の元帝咸熙元年に見ゆ。

<sup>#2</sup> 珧の表は、八十卷武帝咸寧三年に見ゆ。石函を作りて、これを宗廟に藏す。

『宜しく鐘毓の例<sup>#1</sup>に依り、之が爲めに申理すべし』

と。繇<sup>えう</sup>聽<sup>き</sup>かず。而<sup>しか</sup>して賈<sup>かし</sup>氏の族<sup>ぞく</sup>黨<sup>たう</sup>、趣<sup>うなが</sup>して・刑<sup>けい</sup>を行<sup>おこな</sup>はしむ。玼<sup>えう</sup>・號<sup>がう</sup>叫<sup>きう</sup>して・已<sup>や</sup>まず。刑<sup>けい</sup>者<sup>しや</sup>、刀<sup>たう</sup>を以<sup>もつ</sup>て其<sup>そ</sup>の頭<sup>かうべ</sup>を破<sup>やぶ</sup>る。繇<sup>えう</sup>は諸<sup>しよ</sup>葛<sup>かつ</sup>誕<sup>たん</sup>の外<sup>ぐわい</sup>孫<sup>そん</sup>なり。故<sup>ゆゑ</sup>に文<sup>ぶん</sup>鳶<sup>あう</sup>を忌<sup>い</sup>み<sup>#2</sup>、以<sup>もつ</sup>て駿<sup>しゆん</sup>の黨<sup>たう</sup>と爲<sup>な</sup>して之<sup>これ</sup>を誅<sup>ちう</sup>す。是<sup>こ</sup>の夜<sup>よ</sup>の誅<sup>ちう</sup>賞<sup>しやう</sup>、皆<sup>みな</sup>、繇<sup>えう</sup>より出<sup>い</sup>で、威<sup>ゐ</sup>、内<sup>ない</sup>外<sup>ぐわい</sup>に振<sup>ふる</sup>ふ。王<sup>わう</sup>戎<sup>じう</sup>、繇<sup>えう</sup>に謂<sup>い</sup>つて曰<sup>い</sup>はく、

『大事の後、宜しく深く權<sup>けん</sup>勢<sup>せい</sup>に遠<sup>とほ</sup>ざかるべし』

と。繇<sup>えう</sup>從<sup>したが</sup>はず。

壬<sup>じん</sup>辰<sup>しん</sup><sup>#3</sup>、天<sup>てん</sup>下<sup>か</sup>に赦<sup>しや</sup>し、改<sup>かい</sup>元<sup>げん</sup>す<sup>#4</sup>。

賈<sup>か</sup>后<sup>こう</sup>、詔<sup>みこと</sup>を矯<sup>た</sup>め、後<sup>こう</sup>軍<sup>ぐん</sup>將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>荀<sup>じゆん</sup>惲<sup>くわい</sup>をして、太<sup>たい</sup>后<sup>こう</sup>を永<sup>えい</sup>寧<sup>ねい</sup>宮<sup>きう</sup><sup>#5</sup>に送<sup>おく</sup>らしめ、特<sup>とく</sup>に太<sup>たい</sup>后<sup>こう</sup>の母<sup>はは</sup>高<sup>かう</sup>都<sup>と</sup>君<sup>くん</sup>龐<sup>ほう</sup>氏<sup>し</sup>の命<sup>めい</sup>を全<sup>まつ</sup>くし、太<sup>たい</sup>后<sup>こう</sup>に就<sup>つ</sup>きて居<sup>を</sup>るを聽<sup>ゆる</sup>す。尋<sup>つ</sup>いで復<sup>また</sup>た羣<sup>ぐん</sup>公<sup>こう</sup>に諷<sup>ふう</sup>す。有<sup>いう</sup>司<sup>し</sup>・奏<sup>そう</sup>して曰<sup>い</sup>はく、

『皇<sup>くわう</sup>太<sup>たい</sup>后<sup>こう</sup>、陰<sup>ひそ</sup>に奸<sup>かん</sup>謀<sup>ぼう</sup>を漸<sup>ぜん</sup>し、社<sup>しや</sup>稷<sup>しよく</sup>を危<sup>あや</sup>くせんと圖<sup>はか</sup>り、箭<sup>や</sup>を飛<sup>と</sup>ばして書<sup>しよ</sup>を繫<sup>か</sup>け、將<sup>しやう</sup>士<sup>し</sup>を要<sup>えう</sup>募<sup>ぼ</sup>せり。同<sup>どう</sup>惡<sup>あく</sup>相<sup>あひ</sup>濟<sup>な</sup>し、自<sup>みづ</sup>ら

<sup>#1</sup> 七十八卷魏元帝咸熙元年に見ゆ。

<sup>#2</sup> 諸葛誕文鳶の事、七十七卷魏の高貴郷公甘露三年に見ゆ。

<sup>#3</sup> 元康元年三月九日・壬辰は、二九一年四月二十四日。

<sup>#4</sup> 元康と改元す。

<sup>#5</sup> 魏、永寧宮を建て、太后これに居る。

天に絶つ。魯侯、文姜を絶つは、春秋の許す所なり<sup>#1</sup>。  
蓋し祖宗を奉じ、至公に天下に任ずるなり。陛下、已む無き  
の情を懷くと雖も、臣下、敢て詔を奉ぜざらん』

と。  
詔して曰はく、

『此れ大事なり、更に之を詳かにせよ』

と。  
有司又奏す、

『宜しく太后を廢して峻陽<sup>#2</sup> 庶人と曰ふべし』

と。  
中書監張華・議す、

『太后、罪を先帝に得るに非ず。今、其の親しむ所に黨す。  
聖世に母たらずと爲す。宜しく漢の・趙太后を廢して孝成后  
と爲しし故事<sup>#3</sup> に依り、皇太后の號を貶し、還た武皇后と  
稱し、異宮に居き、以て始終の恩を全くすべし』

と。  
左僕射荀愷、太子少師下邳王晃等と議して曰はく、

『皇太后、社稷を危くせんと謀る。復た先帝に配す可から

<sup>#1</sup> 文姜は魯の桓公の夫人なり。齊の襄公、桓公を殺す。文姜與かる。魯の莊公、既に立ち、夫人、齊に遜る。穀梁傳に曰はく、氏姓を言はざるは、これを貶するなり。人の・天に於けるや、道を以て命を承く。人に於けるや、言を以て命を受く。道に若はざれば、天、これを絶つなり。人に若はざれば、人、之を絶つなりと。

<sup>#2</sup> 武帝の陵を峻陽と曰ふに因めるなり

<sup>#3</sup> 三十五卷漢の哀帝元壽元年に見ゆ。

ず。宜しく尊號を貶し、廢して金墉城に詣らしむべし』

と。是に於て、有司・奏す、

『晃等の議に従ひ、太后を廢して庶人と爲さん』

と。詔して可す。又奏す、

『楊駿、亂を造し、家屬應に誅すべかりしが、詔して、

其の妻龐の命を原し、以て太后の心を慰めたり。今、太后、廢せられて庶人と爲る。請ふ龐を以て廷尉に付して刑を行

はん』

と。詔して、許さず。有司復た固く請ふ。乃ち之に従ふ。龐、刑に

臨むや、太后・抱持して號叫し、髪を截りて稽顙し、上表して、賈后に詣りて、妾と稱し、母の命を全くせんと請ふ。省せられず。董養

#1、太學に遊び、堂に升り、歎じて曰はく、

『朝廷、斯の堂を建つるは、將に以て何を爲さんとするか #2。』

國家の赦書を覽る毎に、謀反の大逆をも皆赦し、祖父母父母を殺すに至りては、赦さざるは、以て王法の容れざる所と爲すが故なり。奈何ぞ公卿、議に處り、禮典を文飾し、乃ち此に至るか。天人の理既に滅べり。大亂將に作らんとす』

#1 浚儀の隱者なり。

#2 學校は孝弟の義を申ぶる所以なり。今、母子の大倫を滅す。則ち學校を建つるは、果して何の爲めぞや。

と。  
(養、後、妻ト與ニ荷擔シテ蜀ニ入ル、終ル所ヲ知ラズ。)

有司、駿の官屬を收へ、之を誅せんと欲す。侍中傅祗・啓して曰はく、

『昔、魯芝、曹爽の司馬たり、關を斬りて爽に赴く。宣帝、用ひて青州の刺史と爲せり<sup>#1</sup>。駿の僚佐、悉く罪を加

ふべからず』

と。  
詔して、之を赦す。

壬寅<sup>\*2</sup>、汝南王亮を徵して太宰と爲し、太保衛瓘と、皆、尚書の事を録し、政を輔けしむ。秦王東を以て大將軍と爲し、東平王楸を撫軍大將軍と爲し、楚王瑋を衛將軍と爲し、北軍中候を領せしめ、下邳王晃を尚書令と爲し、東安公繇を尚書左僕射と爲し、爵を進めて王と爲す。楸は望の子なり。董猛を封じて武安侯と爲す。三兄、皆、亭侯と爲る。

亮、悦を衆心に取らんと欲し、楊駿を誅するの功を論じ、督將の侯たる者、千八十一人。御史中丞傅咸、亮に書を遺りて曰はく、

『今、封賞熏赫として、天地を震動す。古より以來、未だ

<sup>#1</sup> 七十五卷魏の邵陵厲公嘉平元年に見ゆ。

<sup>\*2</sup> 元康元年三月十九日・壬寅は、二九一年五月四日。

これあ  
之有らざるなり。功こう無くして賞しょうを獲るときは、則すなはち人、國くに  
の・禍わざはひ有るを樂たのしまざるは莫なし。是これ禍原、窮きはまり無きなり  
。凡おそ此これを作す者は、東安公とうあんこうに由る。人謂ひとおもへらく、

『殿下でんか既にすで至らば、當まさに以て之を正す有るべし』

と。之を正すに道を以てせば、衆亦何ぞ怒らん。衆の怒る所  
は、平かならざるに在るのみ。而るに今皆更に倍論す  
望を失はざるもの莫し』

と。  
亮頗る權執を専らにす。咸復た諫めて曰はく、

『楊駿は、主を震ふの威有り、親戚に委任す。此れ天下の・  
誼譁せる所以なり。今の・重きに處るは、宜しく此の失に反  
し、靜默して神を顧ふべし。大なる得失有るときは、乃ち  
之を維持し、大事に非ざるよりは、一に皆抑遣せよ。比  
、尊門に過るとき、冠蓋車馬、街衢に填塞せり。此の翕習  
、既に宜しく弭息すべし。又、夏侯長容は、功無き  
に、暴に擢でられて少府と爲る。論者謂へらく、

「長容は、公の姻家なり。故に此に至れり」

#1  
亮が功を論じ賞を行ふこと、東安公の時に倍するをいふ。  
#2  
衆人集合して相因りて至るなり。

#3  
夏侯駿、字は長容。

と。四方に流聞するは、益を爲す所以に非ざるなり』

と。亮、皆、從はず。

賈后の族兄車騎司馬模・從舅右衛將軍郭彰・女弟の子賈謐、  
楚王瑋・東安王繇と、並びに國政に預る。賈后、暴戾日々に甚し。繇  
密に・后を廢せんと謀る。賈氏、之を憚る。繇の兄東武公澹、素より  
繇を惡み、屢之を太宰亮に譖して曰はく、

『繇専ら誅賞を行ひ、朝政を擅にせんと欲す』

と。庚戌、詔して繇の官を免じ、又、悖言有るに坐し、廢して  
帶方に徙す。

是に於て、賈謐・郭彰、權執愈々盛に、賓客、門に盈つ。謐、驕奢  
なりと雖も、而も學を好み、喜みて士大夫を延く。郭彰・石崇・陸機  
・機の弟雲・和郁及び滎陽の潘岳・清河の崔基・勃海の歐陽建・蘭  
陵の繆徵・京兆の杜斌・摯虞・琅邪の諸葛詮・弘農の王粹・襄城

晉の文帝、中衛及び衛將軍を置く。武帝、命を受け、分ちて左右衛將軍と爲す。

賈后の女弟賈午、韓壽に適き、謐を生む。賈充、後無し、謐を以て後と爲す。

元康元年三月二十七日・庚戌は、二九一年五月十二日。

郡の名。今の朝鮮の京畿道及び忠清北道の地。

武帝の泰始二年、河南を分ちて滎陽郡を置く。

是の年、東海を分ちて蘭陵郡を置く。



<sup>#1</sup>の杜育・南陽の鄒捷・齊國の左思・沛國の劉瓌・周恢・安平の牽秀  
・潁川の陳畛・高陽<sup>#2</sup>の許猛・彭城の劉訥・中山の劉輿・輿の弟琨、  
皆、謚に附く。號して二十四友と曰ふ。郁は嶠の弟なり。崇と岳と、  
尤も謚に諂事し、毎に謚及び廣城君郭槐の出づるを候ひ、皆、車  
路の左に降り、塵を望みて拜す。

太宰亮・太保、楚王瑋が剛愎にして殺を好むを以て、之を惡み、  
其の兵權を奪はんと欲し、臨海侯裴楷を以て、瑋に代りて北軍中候と爲  
す。瑋怒る。楷、之を聞き、敢て拜せず<sup>#3</sup>。亮復た瑋と謀り、瑋を  
遣りて諸王と與に國に之かしむ。瑋益々忿怨す。瑋の長史公孫宏・舍  
人岐盛、皆、瑋に寵有り、瑋に勸めて、自ら賈后に昵ましむ。后、瑋  
を留めて、太子少傅を領せしむ。盛素より楊駿に善し。衛瑋、其の反  
覆を惡み、將に之を收へんとす。盛乃ち宏と謀り、積弩將軍李肇に因  
り、矯りて瑋の命と稱し、亮・瑋を賈后に譖して云はく、

『將に廢立を謀らんとす』

と。后素より瑋を怨み<sup>#4</sup>、且つ、二公政を執り、己專恣するを得  
ざるを患ふ。夏六月<sup>\*5</sup>、后、帝をして手詔を作りて瑋に賜はしめて曰

<sup>#1</sup>武帝泰始二年、汝南を分ちて襄城郡を置く。

<sup>#2</sup>泰始元年、河間の涿郡を分ちて高陽國を置く。

<sup>#3</sup>敢て中候の職を拜受せざる也。

<sup>#4</sup>瑋が牀を撫するの事を以てなり。八十卷武帝咸康四年に見ゆ。

<sup>\*5</sup>元康元年六月は、二九一年七月十四日から二九一年八月十一日まで。

はく、

『太宰・太保、伊霍の事を爲さんと欲す。王、宜しく詔  
の たいさい たいほう いくわく こと な ほつ わう よろ みことのり  
を宣べ、淮南・長沙・成都王をして諸宮門に屯せしめ、亮  
およ ぐわん ぐわん めん  
及び瓘の官を免ずべし』

と。夜、黄門をして齎して以て瑋に授けしむ。瑋、覆奏せんと欲す。  
くわうもん い  
黄門曰はく、

『事恐らくは漏泄せん。密詔の本意に非ざるなり』

と。瑋も亦、此に因りて私怨を復せんと欲し、遂に本軍  
みことのり いっは さんじふろくぐん #2 め っ い  
た詔と矯り、三十六軍を召し、告げて以はく、

『二公潛に不軌を圖る。吾、今、詔を受け、中外の諸軍  
にこうひそか ふき はか われ いま みことのり う ちうぐわい しようぐん  
を都督す。諸の・直衛に在る者は、皆、嚴に警備を加へよ  
ととく もろもろ ちよくゑい あ もの みな げん けいび くは  
。其の・外營に在るは、便ち相帥ゐて、徑に行府に詣り、  
そ ぐわいゑい あ すなは あひひき ただち かうふ いた

順を助けて逆を討て』

と。又、詔と矯り、亮・瓘の官屬は、一に問ふ所無く、皆、之  
また みことのり いっは りやう ぐわん ぐわんぞく いっ と ところな みな これ  
を罷遣す、  
はけん

『若し詔を奉ぜずんば、便ち軍法をもて事に従はん』

と。公孫宏・李肇を遣はし、兵を以て亮の府を圍ましめ、侍中清河王  
こうそんくわう りてう つか へい あ りやう ふ かこ じちうせいかわう

#1 瑋が掌る所の北軍なり。  
#2 晋の洛城の内外の三十六軍。

遐かをしてくわん 瓘とらを收へしむ。亮りやうの帳下督ちやうかどく #1 李龍りりよう曰はく

『外そとに變へん有り、請こふ之これを拒ふせがん』

と。亮りやう聽きかず。俄にはかにして兵へい、牆しやうに登りて大呼たいこす。亮りやう驚おどろきて曰はく、

『吾われ、貳心にしん無し。何なにが故ゆゑに此ここに至れる。詔書せうしよ、其れ見る可べき

か』

と。宏等くわうらゆる許さず、兵へいを趣うながして之これを攻めしむ。長史ちやうしりうじゆん劉準りやう、亮りやうに謂いつて

曰はく、

『此これを觀みるに、必かならず是れ姦謀かんぼうならん。府中ふちゆうの俊父しゆんかい、林はやしの如ごと

し。猶なほ力戰りよくせんす可べし』

と。又また、聽きかず。遂つひに壁てうに執とらへらる。歎たんじて曰はく、

『我われの赤心せきしん、破やぶりて天下てんかに示しめす可べきなり』

と。世子矩せいしくと俱ともに死す。

衛瓘ゑいくわんの左右さいうも亦また、遐かが詔みことりを矯たむるを疑うたがひ、

『請こふ之これを拒ふせがん。自みづから表へうして報はうを得るを須まちて、戮りくに就つ

とも未いまだ晚おそからじ』

と。瓘くわん聽きかず。初め瓘はじ、司空くわん #2 たりしとき、帳下督ちやうかどく榮晦えいゑい、罪つみ有あり

#1 晉の制、諸公及び諸大將軍には、皆、帳下督及び門下督を置く。  
#2 武帝の太康三年、瓘、司空と爲り、永熙元年、免ず。

、之これを斥しりぞけ遣やる。是ここに至いたりて、晦くわい、遐かに従したがつて瓘くわんを收とらへ、輒すなはち瓘くわん及び子孫共およに九人しそんともを殺くす。遐か、禁きんずる能あたはず。

岐盛きせい、瑋ゐに説とく、

『宜よろしく兵執へいせいに因より、遂つひに賈か・郭くわくを誅ちうし、以もつて王室わうしつを正ただし、

天下てんかを安やすんずべし』

と。瑋ゐ・猶豫いうよして未いまだ決けつせず。會たまたまてんあ。天明たいしく。太子少傅ちうしせう張華ちやうくわ、董猛とうまうをし  
て賈后かこうに説とかしめて曰いはく、

『楚王そわう既に二公にこうを誅ちうせり。則すなはち天下てんかの威權ゐけん盡こく之これに歸きせん  
。人主何じんしゆなにを以もつてか自ら安やすんぜん。宜よろしく瑋ゐの專殺せんさつの罪つみを以もつて

之これを誅ちうすべし』

と。賈后かこうも亦また、此これに因よりて瑋ゐを除のぞかんと欲ほつし、深ふかく之これを然しかりとす。是この  
時とき、内外擾亂ないぐわいぜうらんし、朝廷恟懼てうていききようし、出づる所ところを知らず。張華ちやうくわ、帝ていに白まをし  
、殿中將軍王宮でんちうしやうぐんわうきうを遣つかはし、騶虞幡すうぐはん<sup>#1</sup>を齎もたらし、出いでて衆しうを麾さしまね

『楚王そわう、詔みことりを矯たむ。聽きく勿なかれ』

と曰いはしむ。衆しう、皆みな、仗ちやうを釋すてて走はしる。瑋ゐの左右さいう、復またた一人いちにん無く、窘迫きんぱく

<sup>#1</sup> 幡の名。晋の制、白虎幡・騶虞幡あり。白虎は威猛にして殺を主る、故に以て戦  
を督す。騶虞は仁獸なり、故に以て兵を解く。

<sup>\*2</sup> 【晋陽秋伝】 【考察】 晋朝の騶虞幡、白虎幡 というブログ記事も面白い。

して・爲す所を知らず。遂に之を執へ、廷尉に下す。乙丑<sup>\*1</sup>、之を斬る。瑋、懷中の青紙詔を出し、涕を流して以て監刑尚書劉頌に示して曰はく、

『幸に體を先帝に託せるに、而も枉を受くること乃ち此の如きか』

と。公孫宏・岐盛、竝に三族を夷げらる。

瑋が兵を起すや、隴西王泰<sup>#2</sup>、兵を嚴し、將に瑋を助けんとす。祭酒丁綏諫めて曰はく、

『公は宰相<sup>#3</sup>たり。輕く動く可からず。且つ夜中倉猝なり。宜しく人を遣はして參審定問<sup>#4</sup>せしむべし』

と。泰乃ち止む。

衛瓘の女、國臣に書を與へて曰はく、

『先公の名諡未だ顯れず。毎に怪しむ、一國、蔑然として・

<sup>\*1</sup> 元康元年六月十三日・乙丑は、二九一年七月二十六日。

<sup>#2</sup> 宣帝の弟の子。

<sup>#3</sup> 泰、時に司空たり。晉の公府には西東閣祭酒あり。

<sup>#4</sup> 審に實情を探る也。

言ふもの無きを。春秋の失<sup>#1</sup> 其の咎安にか在る』

と。是に於て、太保の主簿劉繇等、黄幡を執り、登聞鼓<sup>#2</sup>を搥ち、上言<sup>げん</sup>して曰はく、

『初め詔<sup>はじ</sup>を矯むる者至るや、公<sup>みことのり</sup>（詔シテ當ニ官ヲ免スベキヲ

承<sup>すなは</sup>り）即ち章綬を奉送し、（兵杖有リト雖モ、一刃ヲ施サズ）單<sup>たん</sup>

車にして命に従へり。矯詔の文の如き、唯だ公の官を免ずるのみ。而るに故の給使榮晦、輒ち公父子及び孫を收へ、一時に斬戮せり。乞ふ情偽を驗盡し、加ふるに明刑を以てせんことを』

と。乃ち詔<sup>すなは</sup>して、榮晦を族誅し、亮の爵位を追復し、諡<sup>おくりな</sup>して文成<sup>せい</sup>と曰ひ、瓘を封じて蘭陵郡公と爲し、諡<sup>おくりな</sup>して成<sup>せい</sup>と曰ふ。

是に於て、賈后、朝を専らにし、親黨に委任す。賈模を以て散騎常侍と爲し、侍中を加ふ。賈謐、后と謀り、張華が庶姓<sup>#3</sup>にして・上に逼るの嫌無く・而して儒雅にして籌略有り・衆望の依る所と爲るを以て、委ぬるに朝政を以てせんと欲すれども、疑うて未だ決せず。以て

<sup>#1</sup> 春秋公羊傳に曰はく、春秋に、君弑せられて、賊を討たざるは、以て臣子無しと爲すなりと。君弑せられて、臣、賊を討たざるは、臣に非ざるなり。子、讎を復せざるは、子に非ざるなり。

<sup>#2</sup> 大寢の門外に建てたる鼓にして、窮冤して職を失へる者、又は變事を上<sup>たてまつ</sup>る者來りて此の鼓を撃ち、以て上聞に達する也。  
<sup>#3</sup> 同姓に非ざる也。

裴頤はいきに問ふと **#1**。頤き、之これを贊成さんせいす。乃すなはち華くわを以て侍中じちう・中書監ちうしよかんと爲し、頤きを侍中じちうと爲し、又また、安南將軍裴楷あんなんしやうぐんはいかいを以て中書令ちうしよれいと爲し、侍中じちうを加へ、右僕射王戎いうぼくやわうじうと、竝ならびに機要きえうを掌つかさどらしむ。華くわ、忠ちうを帝室ていしつに盡つくし、遣闕あけつを彌縫びほうす。賈后かこう、凶險きようけんなりと雖も、猶ほ華くわを敬重けいちようするを知る。賈模かぼ、華くわ・頤きと、心こころを同じくして政まつりごとを輔たすく。故に數年の間、闇主上あんしゆかみに在りあと雖も、而も朝野安靜しか てうやあんせいなるは、華等くわら こうの功なり。

秋七月 **\*2**、荆・揚の十郡を分ちて江州と爲す **#3**。

八月辛未 **\*4**、隴西王泰の世子越を立てて東海王と爲す。

九月甲午 **\*5**、秦の獻王柬・薨ず。

辛丑 **\*6**、征西大將軍梁王彤を徵して衛將軍と爲し、尚書の事を

録せしむ。

**#1** 廣城君郭槐は、頤の從母なり。故に賈氏、頤を親信す。

**\*2** 元康元年七月は、二九一年八月十二日から二九一年九月十一日まで。

**#3** 是の時、江水の名に因りて江州を置く。

**\*4** 元康元年八月二十日・辛未は、二九一年九月三十日。

**\*5** 元康元年九月十四日・甲午は、二九一年十月二十三日。

**\*6** 元康元年九月二十一日・辛丑は、二九一年十月三十日。

## 二九二年・壬子

二年、春二月己酉<sup>\*1</sup>、故の楊太后、金墉城に卒す。是の時、太后尚ほ侍御十餘人有り。賈后、悉く之を奪ふ。膳を絶つこと八日にして卒す。賈后、太后・靈有り・或は冤を先帝に訴へんことを恐れ、乃ち覆うて之を殯す。仍ほ諸の厭効<sup>#2</sup>・符書・藥物等を施す。

秋八月壬子<sup>\*3</sup>、天下に赦す。

## 二九三年・癸丑

三年、夏六月<sup>\*4</sup>、弘農、雹雨る、深さ三尺。

鮮卑の宇文莫槐、其の下に殺さる。弟普撥立つ。

拓拔綽・卒す。子弗立つ。

<sup>\*1</sup> 元康二年二月一日・己酉は、二九二年三月六日。

<sup>#2</sup> 鬼を伏治するまじなひ。

<sup>\*3</sup> 元康二年八月七日・壬子は、二九二年九月五日。

<sup>\*4</sup> 元康三年六月は、二九三年七月二十一日から八月十八日まで。なおこの年は、二

月の後に閏二月が入る。

<sup>\*5</sup> 兄弟の子？



## 二九四年・甲寅

四年、春正月丁酉<sup>\*1</sup>、安昌の元公石鑒・薨す。

夏五月<sup>\*2</sup>、匈奴の郝散・反し、上黨を攻め、長吏を殺す。秋八月<sup>\*3</sup>、郝散、衆を帥ゐて降る。馮翊都尉、之を殺す。

是の歳、大に饑う。

司隸校尉傅咸・卒す。咸、性剛簡にして、風格峻整なり。初めて司隸校尉と爲るや、上言す、

『貨賂流行す。宜しく深く絶つべき所なり』

と。時に朝政寛弛し、權豪放恣なり。咸・奏して河南の尹澹等の官を免ず。京師・肅然たり。

慕容廆徙りて大棘城<sup>#4</sup>に居る。

拓拔弗・卒す。叔父祿官立つ。

<sup>\*1</sup> 元康四年正月一日・丁酉は、二九四年二月十二日。

<sup>\*2</sup> 元康四年五月は、二九四年六月十一日から二九四年七月九日まで。

<sup>\*3</sup> 元康四年八月は、二九四年九月七日から二九四年十月六日まで。

<sup>#4</sup> 今の奉天省遼瀋道義縣に在り。廆、徒河の青山より大棘城に徙る。

## 二九五年・乙卯

五年、夏六月<sup>\*1</sup>、東海、雹雨。深さ五寸。

荆・揚・兗・豫・青・徐の六州、大水あり。

冬十月<sup>\*2</sup>、武庫火あり。累代の寶及び二百萬人の器械を焚く。十月<sup>\*3</sup>、新に武庫を作り、大に兵器を調す。

拓拔祿官、其の國を分ちて三部と爲す。一は上谷の北・濡<sup>#4</sup>源の西に居り、自ら之を統ぶ。一は代郡の參合陂<sup>#5</sup>の北に居り、兄沙漠汗の子猗𡗗をして之を統べしむ。一は定襄の盛樂<sup>#6</sup>の故城に居り、猗𡗗の弟猗廬をして之を統べしむ。猗廬善く兵を用ひ、西のかた匈奴・烏桓の諸部を撃ち、皆、之を破る。代の人衛操、從子雄及び同郡の箕澹と與に、往きて拓跋氏に依り、猗𡗗・猗廬に説き、晉人を招納せしむ。猗𡗗、之を悦び、任ずるに國事を以てす。晉人の附く者稍く衆し。

<sup>\*1</sup> 元康五年六月は、二九五年六月三十日から二九五年七月二十八日まで。

<sup>\*2</sup> 元康五年十月は、二九五年十月二十六日から二九五年十一月二十三日まで。なお、この直後に閏十月が入る。

<sup>\*3</sup> 元康五年十二月一日丙戌は、二九六年一月二十二日。

<sup>#4</sup> 水の名、今の直隸省保定道漆水縣の西北の檀水なり。

<sup>#5</sup> 今の山西省雁門道高陽縣の北に在り。

<sup>#6</sup> 今の内蒙古綏遠道和林格爾縣の地。

二九六年・丙辰

ろくねん はるしやうぐわつ \*1、 てんか しや  
六年、春正月、天下に赦す。

かひ けんわうくわう こう ちうしよかんちやうくわ もつ しくう な たいありようせいわうたい  
下邳の獻王晃・薨ず。中書監張華を以て司空と爲し、太尉隴西王泰  
をして、尚書令（ノ事）を行はしめ、徙して高密王に封ず。

なつ かくさん おとうとどげん ひようよく ほくち ばらんきやう #2 ろすぬこ #3 とも はん  
夏、郝散の弟度元、馮翊・北地の馬蘭羌・盧水胡と俱に反し  
、北地の太守張損を殺し、馮翊の太守歐陽建を敗る。

せいせいいたいしやうぐんでうわうりん へいじんらうや せんしう しんよう ようしう ししせいなん かいけい  
征西大將軍趙王倫、嬖人琅邪の孫秀を信用し、雍州の刺史濟南の解系  
と、軍事を爭ひ、更に相表奏す。歐陽建も亦、倫の罪惡を表す。朝廷、  
りん くわんいう かうらん #4 せるを以て、倫を徴して車騎將軍と爲し、梁王  
脠を以て征西大將軍と爲し、雍涼二州の諸軍事を都督せしむ。系、其  
おとうときよし ちうじようけつ みな へう しう ちう もつ ていきやう しや こ  
の弟御史中丞結と、皆、表して・秀を誅して以て氐羌に謝せんと請  
ふ。張華以て梁王脠に告げ、之を誅せしむ。脠・許諾す。秀の友人辛  
ぜん これ た ゆう と い  
冉、之が爲めに脠に説きて曰はく、

\*1 元康六年正月は、二九六年二月二十一日から二九六年三月二十日まで。

#2 北地に馬蘭山あり、羌、其の中に居る。因つて種落の名と爲す。馬蘭山は時に蓋

し馮翊・北地二郡の界に屬せしなり。今の陝西省關中道白水縣の西北に在り。

#3 盧水胡は、安定の界に居る。安定は今の甘肅省舊平涼府及び固原州・涇州の地。

#4 擾亂する也。

『氏羌自ら反す。秀の罪に非ず』

と。秀、是に由りて、免るを得たり。倫、洛陽に至り、秀の計を用ひて、深く賈郭に交はる。賈后大に之を愛信す。倫因つて録尚書事を求め、又、尚書令を求む。張華・裴頠、固く執りて以て不可と爲す。倫・秀、是に由りて之を怨む。

秋八月、解系、郝度元に敗らる。秦・雍の氏羌、悉く反し、氏の帥齊萬年を立てて帝と爲し、涇陽を圍む。御史中丞周處、彈劾して・權戚を避けず。梁王彤・嘗て法に違ふ。處、之を按劾せり。冬十一月、詔して、處を以て建威將軍と爲し、振威將軍盧播と、俱に安西將軍夏侯駿に隸し、以て齊萬年を討たしむ。中書令陳準、朝に言つて曰はく、

『駿及び梁王は、皆、貴戚にして、將帥の才に非ず、進みては名を求めず、退きては罪を畏れず。周處は吳の人、忠直勇果なれども、仇有り援け無し。宜しく積弩將軍孟觀に詔して、精兵萬人を以て、處の前鋒と爲らしむべし。必ず能く寇を殄たん。然らずんば、梁王當に處をして先驅

\*1 元康六年八月は、二九六年九月十四日から二九六年十月十三日まで。

#2 故城は今の甘肅省涇原道平涼縣に在り。

\*3 元康六年十一月は、二九六年十二月十二日から二九七年一月十日まで。

#4 景懷皇后は夏侯氏なり。故に駿は外戚たり。

せしめ、救はざるを以てして之を陷るべし。其の敗れんこ

と必せり』

と。朝廷從はず。齊萬年、處來ると聞きて曰はく、

『周府君、嘗て新平<sup>#1</sup>の太守と爲り、文武の才有り、若し專斷して來らば、當る可からざるなり。或は制を人に受けば、此れ禽と成らんのみ』

と。

關中、饑疫す。

初め略陽<sup>#2</sup>の清水氏楊駒、始めて仇池<sup>#3</sup>に居る。仇池は方百頃、其の旁の平地二十餘里、四面斗絶して高く、羊腸蟠道<sup>#4</sup>を爲し、三十六回して上る。其の孫千萬に至りて魏に附く。封じて百頃王と爲す。千萬の孫飛龍、浸く彊盛にして、徙りて略陽に居る。飛龍、其の甥令狐茂搜を以て子と爲す。茂搜、齊萬年の亂を避け、十二月<sup>\*5</sup>、略陽より、部落四千家を帥ゐ、還りて仇池を保ち、自ら輔國將軍・右

<sup>#1</sup> 漢の獻帝の興平元年、安定の鶡觜・右扶風の漆を分ちて新平郡を置く。今の陝西省關中道郿縣の地。

<sup>#2</sup> 故城は今の甘肅省渭川道秦安縣の東北に在り。

<sup>#3</sup> 山の名、本の名は仇維。其の上に池あり、故に仇池と曰ふ。今の甘肅省渭川道成縣の西に在り。

<sup>#4</sup> 險峻にして屈曲したる道。

<sup>\*5</sup> 元康六年十二月は、二九七年一月十一日から二九七年二月八日まで。

賢王と號す。關中の人士、亂を避くる者、多く之に依る。茂搜、迎接撫納す。去らんと欲する者は、衛護して之を資送す。

是の歲、揚烈將軍巴西の趙廩を以て益州の刺史と爲し、梁益の兵糧を發し、雍州を助けて氐羌を討たしむ。

## 二九七年・丁巳

七年、春正月、齊萬年、梁山に屯す。衆七萬有り。梁王彤・夏侯駿、周處をして五千の兵を以て之を撃たしむ。處曰はく、

『軍に後繼無くんば、必ず敗れん。徒に身を亡ぼすのみならず、國の爲めに恥を取らん』

と。彤・駿、聽かず、逼りて之を遣る。癸丑、處、盧播・解系と與に、萬年を六陌に攻む。處の軍士未だ食はず。彤、促して・速かに進ましむ。旦より戦ひ暮に至り、斬獲甚だ衆し。弦絶え矢盡き、救兵至らず。左右、處に勧めて退かしむ。處、劒を按じて曰はく、

元康七年正月は、二九七年二月九日から二九七年三月十日まで。

今の陝西省關中道乾縣の西北に在り。

元康七年正月四日・癸丑は、二九七年二月十二日。

馬嵬山の西に在り、今の陝西省關中道乾縣の東に在り。

『是れ吾が節を効し命を致すの日なり』

と。遂に力戦して死す。朝廷、以て彤を尤むと雖も、而も亦、罪する能はざるなり。

秋七月、雍・秦の二州、大に旱し、疾疫あり。米、斛ごとに萬錢。

丁丑、京陵の元公王渾・薨す。九月、尚書右僕射王戎を以て司徒と爲し、太子太師何劭を尚書左僕射と爲す。戎、三公と爲り、時と與に浮沈し、匡救する所無く、事を僚案に委ね、輕しく出でて遊放す。性復た貪吝にして、園田、天下に徧く、毎に自ら牙籌を執り、晝夜會計し、常に・足らざるが若し。家に好李有り、之を賣る。人が種を得んことを恐れ、常に其の核を鑽つ。凡そ賞拔する所、専ら虚名を事とす。阮咸の子瞻、嘗て戎に見ゆ。戎問うて曰はく、

『聖人は名教を貴び、老莊は自然を明かにす。其の旨同じ

きか異なるか』

と。瞻曰はく、

\*1 元康七年七月は、二九七年八月五日から二九七年九月三日まで。

\*2 元康七年八月一日・丁丑は、二九七年九月四日。

\*3 元康七年九月は、二九七年十月三日から二九七年十一月一日まで。

#4 同僚の官。

#5 象牙にて造りたるかずとり。計算に用ふる具。

『將た同じき無からんや』

と。戎、咨嗟すること良久しく、遂に之を辟す。時の人、之を三語の掾  
と謂ふ。

是の時、王衍、尚書令たり、南陽の樂廣、河南の尹たり、皆、清談  
を善くし、心を事外に宅き、名、當世に重し。朝野の人、争うて  
之を慕效す。衍、弟澄と、好みて人物を題品す、舉世、以て儀準と  
爲す。衍は神情明秀なり。少時、山濤、之を見、嗟歎すること良久しく  
して曰はく、

『何物の老嫗か、寧馨兒、を生める。然れども天下の蒼生  
を誤らん者は、未だ必ずしも此の人に非ずんばあらざるな  
り』

と。樂廣は性冲約にして、物と・競ふ無し。談論する毎に、約言  
以て理を析ち、人の心に厭かしむ。而して其の知らざる所は、默如た  
り。凡そ人を論ずる、必ず先づ其の長ずる所を稱す。則ち短なる  
所は、言はずして自ら見はる。王澄及び阮咸・咸の従子脩・泰山の

「將無<sup>レ</sup>同」と答へしにより官を得たれば三語の掾と云ふなり。

居く也。

此の如き兒。

簡短なる言。



胡母輔之・陳國の謝鯤・城陽の王巨<sup>#1</sup>・新蔡の畢卓、皆、任放<sup>#2</sup>を以て達と爲し、酔狂裸體にして以て非と爲さざるに至る。胡母輔之、嘗て酣飲す。其の子謙之闕ひ、而して聲を厲まして其の父<sup>#3</sup>の字を呼びて曰はく、

『彦國、年老いては、爾るを爲すを得ず』

と。輔之、歡笑し、呼び入れて共に飲む。畢卓、嘗て吏部郎と爲る。比<sup>#4</sup>舍の郎、釀熟す。卓、酔に因りて、夜、甕間に至り、盗みて之を飲む。掌酒者<sup>#5</sup>の縛する所と爲る。明旦、之を視れば、乃ち畢吏部なり。樂廣、聞きて之を笑つて曰はく、

『名教の内に、自ら樂地有り。何ぞ必ずしも乃ち爾せん』

と<sup>#6</sup>。

初め、何晏等、老莊を祖述して論を立て、以爲へらく、

『天地萬物は、皆、無を以て本と爲す。無なる者は、物を開

<sup>#1</sup> 晉書には王尼に作る。

<sup>#2</sup> 任は物の自然に任す也。放は其の心を縦にして制せざる也。

<sup>#3</sup> 即ち輔之なり。

<sup>#4</sup> 近き也。

<sup>#5</sup> 酒の事を掌る人なり。

<sup>#6</sup> 晉書樂廣傳に據るに、廣の此の言は、裸體の者の爲めに發す。卓と相關せざるなり。

き務を成し、往くとして存せざる無き者なり。陰陽、恃みて  
以て化生し、賢者、恃みて以て徳を成す。故に無の・用たる  
、爵無くして而も貴し』

と。王衍の徒、皆、之を愛重す。是に由りて、朝廷の士大夫、皆、浮誕  
を以て美と爲し、職業を弛廢す。裴頠、崇有論を著し、以て其の蔽を  
釋きて曰はく、

『夫れ利欲は損す可けれども、而も未だ有を絶つ可からざる  
なり。事務は節す可けれども、而も未だ全く無くす可からざ  
るなり。蓋し高談の具を飾爲する者有り、深く有形の累を  
列ね、盛んに空無の美を陳ぶ。形器の累は徴有り、空  
無の義は檢し難し。辯巧の文は悦ぶ可く、似象の言は惑  
はすに足る。衆聽、焉に眩ひ、其の成説に溺る。頗る・此  
の心に異なる者有りと雖も、辭、濟すを獲ず、習ふ所に屈  
す。因って謂へらく、虚無の理は、誠・に蓋ふ可からず  
と。一唱百和し、往きて・反らず。遂に世を綜ぶるの務  
を薄んじ、功利の用を賤しみ、浮游の業を高しとし、經實

#1  
證驗なり。

#2  
似て非なるをいふなり。

#3  
辭、其の意を通ずるを得ざるなり。有を崇ぶ者、辭、其の意を通ずることを得ず  
、遂に習俗と爲れる虚無の説に屈せらるるを言ふ。

#1 の賢を卑しとす。人情の徇ふ所、名利、之に従ふ。  
是に於て、文なる者は其の辭を衍べ #2、 訥なる者は其の旨を  
贊す。言を立つるに虚無に藉る、之を玄妙と謂ひ、官に處る  
に職とする所を親しまざる、之を雅遠と謂ひ、身を奉ずる  
に其の廉操を散ずる、之を曠達と謂ふ。故に砥礪 #3 の風、  
彌々以て陵遲す。放なる者は斯れに因り、或は吉凶の  
禮に悖り、容止の表 #4 を忽せにし、長幼の序を瀆し、貴  
賤の級 #5 を混す。甚だしき者は、裸裎 #6 褻慢至らざる所  
無きに至り、士行又虧けたり。夫れ萬物の・形有る者は、無  
に生ずと雖も、然れども (既二) 生ずるや有を以て己が分  
と爲す #7。則ち無は是れ有の遺つる #8 所なり。故に既に  
化するの有を養ふは、無用の能く全くする所に非ざるなり  
。既に有るの衆を治むるは、無爲の能く脩むる所に非ざるな  
り。心は事に非ざるなり。而も事を制するは必ず心に由る

#1 經世の實用あるなり。

#2 敷衍する也。

#3 節を砥ぎ行を礪くをいふ。

#4 儀表。

#5 等級。混は混亂する也。

#6 體を露はす也。

#7 物の未だ生ぜざるときは、有無未だ分れざれども、既に生ずるときは、有にして

無に非ず。

#8 棄つる也。

。然して心を謂つて無と爲す可からざるなり。匠は器に非ざるなり。而も器を制するは、必ず匠に須つ。然して匠を謂つて有に非ずとす可からざるなり。是を以て、重淵の鱗を收めんと欲するは、偃息の能く獲る所に非ざるなり。高塘の禽を隕すは、靜拱の能く捷つ所に非ざるなり。此に由りて觀れば、有を濟す者は皆有なり。虚無は奚ぞ已に有るの羣生に益あらんや』

と。然れども習俗已に成り、頗の論も、亦、救ふ能はざるなり。

拓跋猗咎、漠を度りて北巡し、因つて西して諸國を略す。積むこと五歲、降附する者三十餘國。

## 二九八年・戊午

八年、春三月壬戌、天下に赦す。

#1  
深淵なり。

#2  
魚類。

#3  
高きかきねの上に居る鳥。

\*4  
元康八年三月十九日・壬戌は、二九八年四月十七日。なおこの年は六月の後に閏六月がある。

秋九月<sup>\*1</sup>、荊・豫・徐・揚・冀の五州、大水あり。

はじめ張魯、漢中に在るや、竇の人李氏、巴西の宕渠<sup>#2</sup>より、往きて之に依る。魏の武帝、漢中に克つや<sup>#3</sup><sup>\*4</sup>、李氏、五百餘家を將ゐて之に歸す。拜して將軍と爲す。略陽の北土に遷る。號して巴氏と曰ふ。其の孫特<sup>#5</sup>・庠・流、皆、材武有り、騎射を善くし、性任俠なり。州黨、多く之に附く。齊萬年が反するに及びて、關中荇に饑う。略陽・天水の六郡の民、流移して穀に就き、漢川に入る者數萬家。道路に、疾病窺乏する者有れば、特兄弟常に之を營護振救す。是に由りて、衆の心を得たり。流民、漢中に至り、上書して・巴蜀に寄食せんことを求む。朝議許さず、侍御史李苾を遣はし、節を持して慰勞し、且つ之を監察せしめ、(流民ヲシテ)劔閣に入らしめざらんとす。苾、漢中に至り、流民の賂を受け、表して言はく、

『流民十萬餘口、漢中一郡の能く振贍する所に非ず。蜀に倉儲有り、人復た豐稔なり。宜しく食に就かしむべし』

と。朝廷、之に従ふ。是に由りて、散じて梁・益に在り、禁止す可か

<sup>\*1</sup> 元康八年九月は、二九八年十月二十二日から二九八年十一月二十日まで。

<sup>#2</sup> 縣の名。故城は今の四川省東川道渠縣の東北に在り。

<sup>#3</sup> 魏の武帝、漢中に克つこと、六十八卷漢の獻帝建安二十年に見ゆ。

<sup>\*4</sup> 「魏の武帝、漢中に克つこと」は六十七卷のことだと思われるので、六十七卷にリンクしておいた。

<sup>#5</sup> 李特の事、此に始まる。

らず。李特、劔閣に至り、太息して曰はく、

『劉禪は、此の如きの地を有ちて、人に面縛せらる。豈に庸才に非ずや』

と。聞く者、之を異とす。

張華・陳準、以へらく、趙王・梁王、相繼いで關中に在り、皆、雍容驕貴にして、師老いて功無しと。乃ち孟觀を薦め、沈毅にして文武の才用有りといひ、齊萬年を討たしむ。觀身づから矢石に當り、大に戦ふこと十數たび、皆、之を破る。

#1 凡庸の才。

#2 和緩自得の貌。

#3 貴きを以て自ら驕る也。